

ひなぶく

76

東日本大震災と住田の心

県立遠野緑峰高校の元校長で、現在は住田町の五葉地区公民館長を務める藤井洋治さん(69)。東日本大震災が襲った平成23年3月は、遠野市の非常勤職員だった。

学生から得た支援のヒント

広くアピールし、来訪者と交流を多くむかひなど、充実した日々を過ごしていた。

当時の職務の一つは、遠野早池降ふるさと学校の利用。早池降神社に隣接し、19年3月までは市立大出小中学校の校舎だった。22年6月に、都市・農村の交流促進拠点としてオープンした。

産直機能や食堂があり、木工細工や自然散策にも対応。さらには「座敷わらし神社」もある。洋治さんは同年3月に学校長を退職し、オープン時から着任。県内外に魅力を

「市長が指揮をとり、地区ごとに職員が複数で行き、現場で何が起きているかを伝え

学びの場を地域に①

よど、指示していた」
洋治さんは揺れが襲った直後から、沿岸部に大津波が来るのを予感していた。2日前に発生した三陸沖地震では、青森県から福島県の太平洋沿岸に津波注意報が発表され、大船渡では55センチの津波を観測。その様子を伝えるニュー

ス映像が頭をよぎった。
寄せられた情報から、市内では人的被害がないことが分かり、少しずつ落ち着きが広まってきた。
「開口一番だった。『陸前高田が大変だ』と。また

遠野以外の情報が錯綜していた段階で、どうやってその情報を入手したのかは分からない。やっぱり彼も、気仙の一人として大津波を連想したのだと思う。信じられない半面、大変なことになっているかもしれないとの恐怖が大きくなった」

夕方、自宅に戻った。気仙岡市に勤務先がある近隣の住民から、被害の甚大さを耳にした。洋治さんは震災翌日も遠野市役所に行ったが、手が足りていたため自宅待機に。親族や知人の安否を確認したかった半面、ガソリンがわずかしかなく、思うように動くことができなかった。
数日後、洋治さんから非常勤職員は、遠野市内で救援物資の仕分け作業にあたった。震災にかかわる仕事に就くことができたのは、洋治さんにとってもありがたかった。

「私を含め五葉の人たちは、どう行動していいか分からないうちから思っていたのではないか。何かしなければいけない気持ちには、もちろんある。消防団のように役割があったり身内が被災していれば別だが、当時はなかなか自分自身の判断だけでは動けない。もどかしさのようなものを抱えていたと思う」

一方で五葉地区では、震災前にはない動きが生まれた。23年4月以降、同地区公民館はボランティアの宿泊拠点として利用され、地元外の人々が入りやすくなった。
5月には、岩手大学ボランティアセンターが呼びかけ、同地区公民館を宿泊拠点とした活動を展開。全国13大学から512人が訪れ、釜石市や陸前高田市の仮設住宅団地などで避難所から移ってきたばかりの被災者を励ました。

洋治さんはその動きを知り、いてもたってもいられなくなった。地元食材でつくったよもぎもちを携え、地区公民館に向かった。
「あず、いへるうさま」と伝えたかった。それから、学生だけでなく先生たちも多く詰めていて、学びの場ができているとも思った。それが、頼もしかった」

少しずつ、学生らとの交流が広がった。洋治さんの心には、ボランティアを支えることが被災地支援になるんだという確信も芽生えていった。



館長になったり上有住

(日曜日掲載)